声楽におけるハイブリッド型レッスンの実践

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 由香, 今岡, 多恵, Baba, Yuka, Imaoka, Tae メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2686

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第51号　2022度

研究ノート

声楽におけるハイブリッド型レッスンの実践

Practice of Hybrid Lessons in Vocal Music

馬場由香[1)]、今岡多恵[2)]
1）洗足学園音楽大学　2）常葉大学
Baba Yuka, Imaoka Tae

1　はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）は、2019年12月初旬に、中国の武漢市において感染者が報告されてから、数か月ほどの間にパンデミックと言われる世界的な流行となった。こうした背景から、2020年度から日本の各大学ではオンライン授業が実施され、大学の授業の実施方法を対面からオンラインへと大幅に変更する必要が生じた。

しかし、実際にオンライン授業が本格的に進められた2020年度に朝日新聞社・河合塾が共同で実施した調査「ひらく日本の大学」によると、オンライン授業における授業の質保証等に関する課題について「大きな課題がある」または「課題である」と回答した割合に対して「『実験・実習・実技系科目への対応』のみ7割を超えた。」（朝日新聞・河合塾共同調査2021：4）と報告している。このように、机上では身につけにくい科目に関するオンライン授業の在り方について、改善を求める声が多くあった。また、2020年8月に実施された文部科学大臣の会見では、「芸術系の大学、それから芸術系の学部に通っている学生さんたちが、今、オンライン授業で苦しんでいるという窮状を訴えられました…（略）…大臣のお考えをお願いできますか」という質問に対して、「美術や音楽あるいは体育などの分野においては、対面ならではの教育効果の重要性も踏まえ、遠隔授業を継続する場合においても、効果的な対面授業との併用などを検討していただきたいと考えております。」と回答している。さらに、「オンラインと対面とハイブリッドな授業ですね、後期はやってみようと思うのが普通の学校の判断ではないかと期待しているところでございまして。…（略）…今後、ウィズコロナ、ポストコロナの社会では、遠隔のよさと対面のよさを上手に組み合わせていく教育を実現していくことが重要でありまして、今回の経験により蓄積されている好事例を横展開しながら、必要な検討してまいりたいと思います。」と言及している。このようにウイズコロナ・ポストコロナ社会に向けた対面授業とオンライン授業を併用するハイブリッド型の授業の必要性が求められた。

音楽科目の学びについて、舘岡（2020: 141）は「元来、楽器や声楽などの実技演習は、指導者と受講生とが師弟関係を結び、その中で教育が行われていくものであり、受講生は指導者の芸術性や技術、伝承される演奏習慣などを定期的かつ直に学ぶ。この方法は今も継承され、実技演習では一対一の対面指導による技術習得が通例である。」と指摘している。また、川上・根津（2021: 39）は、「対面レッス

ンの醍醐味として①実技レッスンにおける表情を見ながら情報を共有する重要性と②連続的ライブ感を味わえる対面型レッスンにおける学びや体験」（川上健太郎　根津知佳子 2021：39）を挙げている。このように、技術に関する科目が多くある芸術系大学の授業やレッスンは、対面であるからこそ多くの学びを享受することが可能な科目といえる。そのため、オンライン授業においても、川上・根津（2021: 39）が指摘するようにライブ感を味わえるよう工夫する必要がある。

オンライン授業について、文部科学省（2020）の「令和２年度における大学等の授業の開始等について」の中で、テレビ会議システム等を利用した同時双方向型の遠隔授業（以下、ライブ型オンライン授業とする）や、オンライン教材を用いたオンデマンド型の遠隔授業（以下、オンデマンド型オンライン授業とする）の２つを挙げている。オンラインレッスンにおいても、ライブ型オンラインレッスンとオンデマンド型オンラインレッスンが可能である。ライブ型オンラインレッスンの実施方法として、従来の対面レッスン時のように双方の様子を見ながらレッスンを実施することが挙げられる。ライブ型オンラインレッスンのメリットとして、生徒と教員が同じ時間を共有しながら実施できるため、川上・根津（2021）が指摘する「ライブ感」のあるレッスンを実施することが可能である。デメリットとしては、わずかではあるがタイムラグが生じることが挙げられる。長澤・井上（2020: 35）は、「オンラインレッスンでは、インターネット通信のタイムラグによる音ズレの問題もあり、離れた場所にいる者同士が同時に音を出すことは非常に困難である。」と指摘している。こうした指摘から、ライブ型オンラインレッスンを実施する際には、その点を考慮したレッスン内容にする必要がある。一方、オンデマンド型オンラインレッスンの実施方法として、学生の歌を動画提出、または動画を YouTube にアップロードしてもらい、それを教員が見てコメントをするなどの方法が挙げられる。メリットとしては、学生が自由な時間に動画を録画することができる点、何度も撮り直しをして提出することができる点、音ズレの問題がない点が挙げられる。デメリットとしては、直ぐに指導を受けられないため、川上・根津（2021: 39）が指摘する「ライブ感」が薄れてしまうことが挙げられる。こうした双方のオンラインレッスンのメリット・デメリットや既述した音楽科目の性質を考慮すると、多少のタイムラグが生じる可能性はあるが、レッスン内容を吟味して実施するライブ型オンラインレッスンと対面レッスンを用いたハイブリッド型レッスンの在り方を検討する必要がある。

そこで本論では、COVID-19 が蔓延する 2021 年に実施したハイブリッド型レッスンの実践について報告することを目的とする。なお、本論において、ハイブリッド型授業に倣い、ハイブリッド型レッスンを「対面レッスンとライブ型オンラインレッスンを組み合わせて実施するレッスン」と定義する。COVID-19 が蔓延する中、実施した対面レッスンおよびライブ型オンラインレッスンの環境整備、それぞれのレッスン形態を生かした実践内容について報告する。また、第一著者が担当している声楽コースの学生を対象に、学生自身が感じた対面レッスンとライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリットに関するアンケート調査を実施し、ハイブリッド型レッスンの可能性について検討し、ウイズコロナ・ポストコロナ社会に向けた声楽のレッスンの在り方について考察する。

2　声楽研究Ⅰ～Ⅳ（レッスン）の概要とレッスンの実施計画

本論で扱うレッスンは、第一執筆者が勤務する大学の科目「声楽研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（通年）」である。その内、COVID-19 が蔓延する中実施された 2021 年度後期のレッスンを対象とする。本科目の 2021 年の SENZOKU ポータルシラバス照会に記載された「主題・到達目標」、「授業概要」、「授業時間外の学習（予習復習について）」、「授業計画」の内容は下記の通りである。

主題・到達目標

声楽の専門技術の向上を目指し、基本的な演奏テクニックや表現技法を修得し、将来は豊かな音楽性を確立して、国内外において活躍出来る声楽家を目指し、ソリスト、オペラ歌手、幅広いジャンルの歌手、または教育者などそれぞれの目標を見据えた、より実現性のあるレッスンを行う。

シラバスの概要

新型コロナウイルス感染予防対策のため、遠隔授業を実施する場合がある。遠隔授業実施方法の詳細は第１回授業で説明する。個人レッスンを主とし、研究目的にそって演習中心の研修を行う。

４年間という短い期間の中で一人一人の技術能力や演奏表現などを考え、1・2 年では特に発声の確立を、3 年ではより高度な歌唱法の習得と、音楽表現の習得。4 年次では、その全てを卒業試験で発揮できるよう指導していく。

授業時間外の学習（予習復習について）

各自、1 年次より 4 年次までの目標を立て、研究目的に沿い、担当教員のアドバイスを受け、発声の基礎、テクニック、表現、歌詞の意味、内容、表現法を研究し、次回のレッスンまでに準備する。

授業計画

授業計画は、表１の通りである。

表１　授業計画（2021 年　SENZOKU ポータル シラバス照会を参考に作成）

回	授業内容	回	授業内容
1	後期研究課題の決定	9	後期選択曲の歌唱演習
2	後期練習曲における基礎力の向上	10	学年末試験の曲の絞り込み
3	後期課題曲における基礎力の向上	11	後期選択曲の発音練習
4	後期発声練習における、声のトレーニング	12	後期練習曲を含めた課題曲の演習
5	後期練習曲における基礎力の向上 応用	13	後期選択曲の歌唱技術を学ぶ。
6	後期課題曲における、歌唱技術を学ぶ。	14	後期選択曲の表現法を学ぶ。
7	後期課題曲における、表現法を学ぶ。	15	学年末試験曲における総合的な課題の演習
8	学年末試験における候補曲の選出		

三

3　対面レッスン、ライブ型オンラインレッスンの実践

3-1　環境整備

(1) 対面レッスン

川上・根津（2021: 39）は、「対面レッスンの醍醐味として①実技レッスンにおける表情を見ながら情報を共有する重要性と②連続的ライブ感を味わえる対面型レッスンにおける学びや体験」を挙げている。このように対面レッスンでは多くの学びを修得することが可能である。しかし、COVID-19 が拡大した要因の１つに飛沫が挙げられる。全日本合唱連盟・東京都合唱連盟が行った合唱活動における飛沫実証実験報告書によると、飛沫の威力は「日本語歌唱では、男性で前方平均 46.5cm（最大 61cm）、女性で 26.5cm（最大 57cm）まで飛ぶこと、ドイツ語歌唱では飛沫がより遠方（最大 111cm）まで観測された。通常のマスク（不織布、布、ポリエステルのいずれも）は可視化される飛沫が顕著に減少した。」と指摘されている（全日本合唱連盟・東京都合唱連盟 ：2020）。こうした指摘から、対面レッスンでは飛沫を防止するため双方がマスクを着用して実施した。さらに、ピアノ（伴奏者）と歌い手（学生）との間にパーテーションを設置し、実施した（図 1）。

また、第一著者が勤務している大学では施設内には空調換気システムがあるが、COVID-19 が猛威を振るい始めた 2020 年度より、「新型コロナウイルス感染予防のための ～行動様式のガイドライン～ 2020」を参考に対面レッスンをする際は、30 分に 1 度 10 分程度ドアを開放して、換気を行った。

(2) ライブ型オンラインレッスン

ライブ型オンラインレッスンを実施するにあたり、教員と学生が双方向のやり取りをするために Google Meet のビデオ会議システムを使用した。ライブ型オンラインレッスンで重要なことの一つに環境を整えることが挙げられる。そのため、第一に端末、第二に通信環境、第三に歌を歌ったり音を出したりしても問題のない環境を学生と教員の双方が整える必要がある。

まず、端末については、双方にカメラおよびマイクが搭載されたパソコン、タブレット、スマートフォンのいずれか１台ずつ準備し、図 2 のように端末を譜面台やスマホホルダーまたはピアノの譜面台などに置き、学生と教員双方の表情が確認できるように顔を端末画面の中心に保持して設置した。また、全身の姿を見ながら指導する際には、全身が見える位置に端末を置くようにした。

次に、通信環境（Wi-Fi 環境）についてである。総務省による「令和 2 年度 情報通信白書」において、「教育機関における遠隔授業の取り組みが拡大する一方で、家庭での ICT 環境の格差による学習機会格差への影響が懸念されている」（総務省 2020：157）ことが指摘されている。実際に、2020 年度当初は、Wi-Fi 環境が整っていない学生もおり、ライブ型オンラインレッスンを実施することが困難な時期があった。レッスンの実施が困難な学生は、大学側からモバイルルーターの貸し出しがあり、それを利用することで Wi-Fi 環境を整えレッスンを受けてもらった。

最後に、歌を歌ったり音を出したりしても問題のない環境（音が出せる環境）についてである。自宅で声や音を出せる環境が整っている学生は、特に問題はなかった。しかし、そうした環境を自宅で整えることが困難な学生については、大学の施設（練習室）で、歌が歌える環境を整えてレッスンを受けて

もらった。大学の施設（練習室）の使用が難しい場合は、発音や筋力強化のためのトレーニング指導を行い、歌を歌わなくても可能な指導を行った。

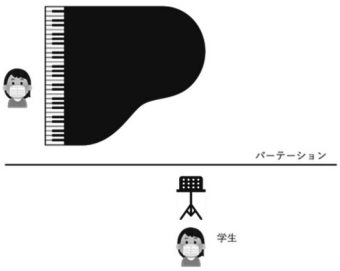

図１　対面レッスンの実施状況

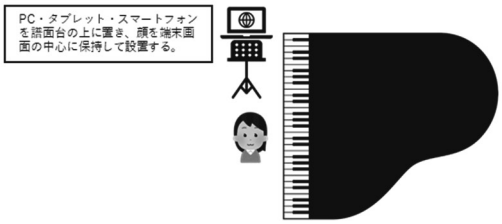

図２　ライブ型オンラインレッスンの実施状況（一例）

3-2　各レッスン形態で重視したレッスン内容

(1) 対面レッスン

既述したように、対面レッスンでは教員も学生も双方にマスクを着用していた。そのため、発声練習時や課題曲の歌唱時に、学生がどのように表情筋を使っているか、口をどのように開けているかについて確認することが困難であった。そこで、対面レッスン時には、音の響きの確認や身体の筋肉の使い方を中心にレッスンを行った。具体的な指導内容の概要は、表２の通りであった。

表２　各レッスン形態において第１筆者が実施した具体的な指導内容の概要

【対面レッスン】
・声の響きの確認 教員と学生が同じ空間で双方の声の響きを共有することで、学生の技術向上に繋げた。 ・身体（筋肉）の使い方 歌の技術向上には、身体（筋肉）の使い方のバランスが大切である。筋肉の使い方で声質や響きに影響が出る。そのため直接、学生の身体、特に筋肉の使い方のバランスを見て指導した。
【ライブ型オンラインレッスン】
・表情筋の使い方 表情筋については、「微笑しているような唇の形で歌うことは、推奨すべきやり方だと言われるほど賞用されている。」（フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド＝マーリング2021：69）という指摘がある。そのため、表情筋の使い方については、微笑しているときの表情を保ちながら、より効果的に筋肉を使うことができているかについて確認しながら指導した。 ・口の開閉 声楽で最も重要な役割として言葉を歌で伝えることが挙げられる。言葉を正確に伝えるためには、正しい口の開け方が大切である。そのため、学生の口の開閉の確認をしながら指導した。

五

(2) ライブ型オンラインレッスン

ライブ型オンラインレッスンでは、長澤（2020）が指摘した音ズレの問題を改善するため、マスクを外して発声練習や課題曲の歌唱を実施する中で表情筋や口の開け方を重点的に指導した。具体的な指導内容の概要は、表２の通りであった。

また、レッスンの録画を希望する学生については、Google Meet の録画機能を用いて録画することを許可した。レッスンの様子を録画した学生は、教員や学生の表情筋や口の開閉の様子をレッスン後に確認することができたため、歌唱における課題を明確にすることが可能となった。

3-3　各回で実施したレッスンの実践内容

以下に、第一筆者が各回で実施したレッスンの実践内容を挙げた。各回の到達目標と実践は、既述した本科目のシラバス内容を基に授業形態に合わせて設定した。ただし、学生の体調や学習の進度によって各回の授業内容を変更することがあった。

第１回　後期研究課題の決定（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　後期実技試験を念頭に学生の課題を明確にして、後期練習曲を選曲する。

実践　到達目標を達成するため、前期実技試験に対する自己評価の聞き取りと今後の課題についてディスカッションをした。第１回をライブ型オンラインレッスンにした理由として、マスクを外して学生の様子や表情を確認しながらディスカッションを行うためである。まず、前期の実技試験に対する自己評価では、学生自身が自分の演奏内容に対して達成できた点と達成できなかった点をどのように理解しているかについて評価してもらい、学生が考える課題について共有した。次に、学生が考える課題に加え、教員が学生の話を聞く中で見えてきた課題についてディスカッションをして、後期実技試験に向けて各学生が課題を解決するために取り組む内容と後期の実技試験の課題曲を決定した。

第２回　後期練習曲における基礎力の向上（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　学生の後期練習曲を通して、基礎力の向上に繋げる。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。まず、第１回で共有した課題を確認し、第２回で達成すべき課題を決定してからレッスンを実施した。具体的な内容として、基礎力となる発声のレッスンでは表情筋、口の開閉を中心に実施した。その後、後期練習曲を通して発声のレッスンで行った表情筋、口の開閉を体得できているについて確認した。

第３回　後期課題曲における基礎力の向上（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　第２回で課題となった発声を克服し、後期練習曲を通して基礎力の確認をする。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。まず、第２回レッスンで課題となった点を確認し、第３回で達成すべき課題を決定してからレッスンを実施した。具体的な内容として、発声のレッスンでは、表情筋、口の開閉（口角の上げ下

げや軟口蓋の開け方）を中心に実施した。特に表情筋の使い方と口の開閉の仕方については、教員が実際に実践をした。それを学生が画面を通して確認し、発声や後期課題曲のポイントとなる個所を模倣するなどした。

第４回　後期発声練習における、声のトレーニング（対面レッスン マスク着用）

到達目標　ライブ型オンラインレッスンで行った表情筋・口の開閉についてマスクをした状態で行い、声の響きを意識して発声と後期練習曲を歌えるようにする。

実践　到達目標を達成するため、教員と学生の双方が、マスクを着用し同じ空間で声の響きが共有できる対面レッスンを実施した。まず、第２回・第３回のレッスンにおいて実施した表情筋や口の開閉については、歌の音色を聞き、第２回・第３回の目標が達成できているかについて確認した。また、同じ空間を共有することで、各学生の声の響きと全身の筋肉の使い方のバランスについて確認をし、歌っている時の学生の体の筋肉の使い方に関する強弱について細かく指導をした。

第５回　後期練習曲における基礎力の向上 応用（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　第４回の対面レッスンで行った声の響きと身体の使い方の確認とともに後期練習曲を通して正確な発音を強化する。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。第４回で行った対面レッスン時の課題について、学生が達成できた点と達成できなかった点をどのように理解しているかについて共有した。合わせて、第５回レッスンの課題について学生とディスカッションをした。また、学生の音の響きの問題点を解決するため、ライブ型オンラインレッスンの特徴を生かして歌詞の発音の強化を行った。発音する際の表情筋・口の開閉（軟口蓋の開け方など）について、学生と教員との違いなどについて画面を通して細かく指導した。また鏡を用意してもらい、発声時における学生自身の表情や口の動かし方とその動きによる響きの違いについて確認してもらった。鏡を用意できない学生には、Google Meet で自分の顔が映るように設定してもらい、上記内容をチェックしてもらった。

第６回　後期課題曲における、歌唱技術を学ぶ（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　これまで行ったライブ型オンラインレッスン、対面のレッスンを終えて、どのくらい歌唱技術を体得できたかについて（特に歌詞の発音、表情筋、口の開閉）確認し、更なる向上に繋げる。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。第５回までのレッスンに関する自己評価をしてもらい、今後の課題についてディスカッションをした。まず自己評価では、学生自身が自分の演奏内容に対して達成できた点と達成できなかった点をどのように理解しているかなどを評価してもらい、学生が考える課題について共有をした。

次に、学生が考える課題に加え、教員が学生の話を聞く中で見えてきた課題、教員が考える学生の課題についてディスカッションをして、今後のレッスンに向けて課題を抽出し、課題解決に向けて取り組む内容を決定した。

第７回　後期課題曲における、表現法を学ぶ（対面レッスン マスク着用）

到達目標　第６回までの演習の成果（歌の技術）の確認と表現方法を学ぶ。

実践　到達目標を達成するため、マスクを着用し、声の響きを確認できる対面レッスンを実施した。第６回のディスカッションで挙がった課題の中で、声の響きを中心に課題曲の歌詞の意味を理解しながら音に合わせるなど表現方法を指導した。

第８回　学年末試験における候補曲の選出（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　後期練習曲および後期課題曲の中から、学生の学年末試験候補曲を選曲する。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。まず、発声・発音を中心に実施した。その後、後期練習曲および後期課題曲の中から学年末試験の候補となる曲を選曲するため、学生とディスカッションを行った。その際、第７回対面レッスン時の様子から学生の声の響きや身体の筋肉の使い方が良くできている曲や学生が自信をもって歌うことができている曲を中心に検討した。

第９回　後期選択曲の歌唱演習（対面レッスン マスク着用）

到達目標　第８回で選曲した曲における声の響きと身体の使い方のバランスを見る。

実践　到達目標を達成するため、マスクを着用し声の響きを確認できる対面レッスンを実施した。まず第８回で選定した曲の確認をし、その曲に合わせた声の響きかせ方や身体の使い方を中心に指導した。その際、学生からライブ型オンラインレッスンで行った発音がマスクを着用した状態で発音することの困難さについて訴えがあった。その理由として、マスクを着用することで口角が抑えられてしまい、口を開閉するたびにマスクが動いてしまうことが挙げられる。また、マスクが動かないように気をつけると口の開閉が思うようにできず、口の開きが小さくなり歌いにくくなってしまったことが考えられる。こうした点を補うため、第４回で指導したように口元ではなく、軟口蓋を意識して歌うよう指導した。

第10回　学年末試験の曲の絞り込み（対面レッスン マスク着用）

到達目標　第８回で選曲した曲の中から、学生の学年末試験の曲を絞り込む。

実践　到達目標を達成するため、第８回で選曲した曲の発音、声の響き、身体の筋肉の使い方を総合的に確認した。その中から、学生に合った曲を学生とディスカッションをしながら選曲した。

八

第11回　後期選択曲の発音練習（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　第10回で選曲した曲の発音を強化する。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。第10回で選曲した曲に合わせた軟口蓋の開け方や唇を使った時の表情筋の使い方に関して指導した。まず、教員が手本を見せるため、教員の顔にスポットが当たるように顔をカメラに近づけ、表情筋の動かし方の見本を見せた。その際、様々な角度から確認できるようにするため、顔の正面・左右を映した。学生は教員の見本を参考に実践した。このような取り組みをすることで、学生は教

員との違いに気づき、創意工夫をしていた。

第 12 回　後期練習曲を含めた課題曲の演習（対面レッスン）

到達目標　第 10 回で選曲した曲を通して身体の筋肉の使い方や声の響き、表現方法を追及する。

実践　到達目標を達成するため、学生はマスクを外して声の響きを確認できる対面レッスンを実施した。その際、教員とピアニストはマスクを着用した。

学年末試験は、演奏者（学生）と審査員の距離を 3 メートル以上離し、感染予防対策を徹底したうえで、マスクを外して歌うことになっている。そのため試験環境を想定して、既述した対面レッスン時における環境整備を行ったうえで、演奏者（学生）のみマスクを外した。感染予防をより充実させるため、演奏者（学生）がマスク着用している時よりも十分に換気をした。

第 13 回　後期選択曲の歌唱技術を学ぶ（ライブ型オンラインレッスン）

到達目標　学生が第 10 回で選曲した曲の歌唱技術を向上させる。

実践　到達目標を達成するため、マスクを外して双方の表情が確認できるライブ型オンラインレッスンを実施した。第 12 回の対面レッスンでは、学生はマスクを外したため COVID-19 が蔓延する前の対面レッスンに近い状態で歌うことができた。また、教員もマスクを外した状態で歌を歌っている学生の様子を見ることができたため、教員は学生の達成点と課題点を確認することができた。よって第 13 回では、その点についてフィードバックを行った。希望者には伴奏者を含めたレッスンを実施した。その際、感染対策のため、学生はマスクを外したが伴奏者はマスクを着用すること、学生と伴奏者の距離を直径 2 メートル確保可能であることを条件とした。また、教員がカメラ越しで学生がレッスンを受けている部屋の状況を確認し、部屋が狭い場合は 15 分に 1 度 10 分程度換気を行うこと、または部屋が広い場合は 30 分に 1 度 10 分程度の換気を行うことを指示した。端末の設置については、学生と伴奏者が画面に映るよう設置してもらった。部屋の関係で学生と伴奏者をともに画面に映るよう設置することが困難な場合は、学生のみ映るよう設置してもらった。こうした取り組みにより、学生と伴奏者が同じ空間でレッスンを受けることが可能となり、演奏者間のタイムラグがなくなったため、より対面レッスンに近い形でライブ型オンラインレッスンを実施することが可能となった。

第 14 回　後期選択曲の表現法を学ぶ（対面レッスン）

到達目標　学年末試験を想定し、歌の技術強化をする。

実践　到達目標を達成するため、学生はマスクを外して声の響きを確認できる対面レッスンを実施した。その際、教員と伴奏者はマスクを着用した。第 13 回のレッスンで伝えた指導内容について実践させた。その際、表現方法については空間を把握し、それを意識して声を響かせるためには、どの筋肉をどの様に使うと良いかなど学生の課題に応じて指導した。

第 15 回　学年末試験曲における総合的な課題の演習（対面レッスン）

到達目標　研究発表会を行い、学年末試験曲の課題を確認する。

実践　到達目標を達成するため、学生はマスクを外して声の響きを確認できる対面レッスンを実施した。その際、教員と伴奏者はマスクを着用した。具体的には、研究発表会を試験会場で実施し、授業のまとめを行った。

4　アンケート調査

4-1　目的

既述したレッスン内容を受講している学生を対象に、学生から見た対面レッスンのメリット・デメリットおよびライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリットについて調査を行い、ハイブリッド型レッスンの可能性について検討することを目的とする。

4-2　方法

調査対象者

第一筆者が担当する声楽コースの授業「声楽研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」に値する学生および聴講生の合計13名を対象に調査を行った。

調査時期および手続き

本調査は、2021年9月から2022年1月の第一筆者の対面レッスンおよびライブ型オンラインレッスンの終了後に、Google Formを用いてオンライン調査を実施した。その際、調査対象者には、質問への回答は自由意志であること、回答しなかったり、回答を途中で中断したりすることで不利益が生じないことを説明した。

調査内容

対面レッスンおよびライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリットについて調査対象者の率直な意見を得るために、以下の4つの項目を挙げ、アンケート調査を実施した。具体的には、①対面レッスン（双方マスク着用）のメリットとデメリット、②ライブ型オンラインレッスンのメリットとデメリットについて自由記述にて回答を求めた。

4-3　結果と考察

対面レッスンおよびライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリットの内容について分類した結果、対面レッスンのメリットについては3つ、デメリットについては2つの概念が見出された。ライブ型オンラインレッスンのメリットについては3つ、デメリットについても3つの概念が見出された。

(1) 対面レッスン（双方マスク着用）のメリット・デメリット

対面レッスンのメリット・デメリットについて、表3にまとめた。

対面レッスンのメリットとして、第一に「伴奏との合わせやすさ」が挙げられた。具体的な例として

は、「伴奏と合わせられること」、「ピアノ伴奏に合わせて（ズレなく）歌うことができる」であった。ライブ型オンラインレッスンでは、タイムラグにより教員または伴奏者のピアノ伴奏に合わせて歌うと音ズレが生じた。音ズレを解消するために、早い段階で指導者がピアノ伴奏のみを録音した音源を学生に渡し、学生がその音源に合わせて歌えるようにした。しかし、録音されたピアノ伴奏に合わせて歌うことは、カラオケで歌うような形となり、歌い手に合わせた演奏とならない点が問題として挙げられた。具体的には、学生の体調によってフレーズを長く歌えないことや呼吸が浅くなってしまうことが生じた際に、学生の体調に合わせてテンポを速くすることもあるが、そうした応用が利かず困難さが生じた。そのため、アカペラで歌うなどの工夫が必要となった。こうした背景もあり、対面レッスン時のメリットとして「ピアノ伴奏との合わせやすさ」を挙げていることがうかがえる。

第二に「教員の声の響きの確認」である。具体的な例として、「響きを直接肌で感じられること」、「先生の響きを真似する事ができる」が挙げられた。こうした回答については、教員と学生が同じ空間でレッスンができたことが関係している。互いに異なる環境で実施されるライブ型オンラインレッスンでは、それぞれの音に関する環境が異なる。しかし、対面レッスンでは声の響きを画面越しではなく、直接的に体で感じることができる。よって、対面レッスンを実施することで、双方の違いをすぐに理解しやすく、学ぶべきポイントが明確となったことが示唆された。

第三に「全身（筋肉）のバランスについて」である。具体的な例として、「全身のバランスを見てもらえる」、「オンラインでは見えにくい体の使い方や動きを直接指導していただけることです」が挙げられた。全身の筋肉の使い方によって、声の響きは変化する。そのため、全身の筋肉バランスを見る事は非常に重要である。対面レッスンでは、歌っている際の全身（筋肉）の使い方を等身大で確認することができるため、筋肉を異なった使い方をしているときには直接的に指導することが可能となった。よって、メリットとして挙げられたことが考えられる。

対面レッスンのデメリットについて、表3にまとめた。対面レッスンのデメリットとして第一に「マスクで口元が確認できない」ことが挙げられた。具体的な例としては、「先生の表情筋を確認できない」、「口元が見えないため、口の形など視覚による確認ができない」であった。フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド＝マーリング（1987: 69）は、唇、舌、口蓋、口蓋垂について声楽家にとって推奨すべきやり方として「微笑しているような唇の形で歌うことは、推奨すべきやり方だと言われるほど賞用されている。」と述べている。こうしたことからも口元の筋肉を的確に動かすことは、言葉の発音を正確に伝えたり声の質を高めたりする事につながる。そのため、歌を歌う際の重要なポイントとして挙げられる。しかし、マスクを着用することで口元の筋肉が押さえつけられてしまい、口角が下がってしまう。よって、マスクを着用しながら歌うことについては、ライブ型オンラインレッスンにおいては可能だった口元を意識したり確認したりしながら歌うことができなくなること、さらにその指導を受けることが難しくなったことが影響してデメリットとなったことが指摘できる。

第二に「マスクによる疲労感」である。具体的な例として「マスクで呼吸が苦しくなる点」、「酸欠になりやすくなる」、「喉に余分な力が入っていつもより負担や疲労が大きかったように思う」が挙げられた。歌うことは全身運動であるため、マスクをしていない状態でも体力が消耗する。さらに、マスクを着用しながら歌うことで疲労感が増し、喉に負担がかかった可能性が指摘できる。こうしたデメリット

を補うため、マスクを着用する対面レッスン時に、教員は学生の体力に注視し、喉の負担を軽減させるような指導を行う必要が示唆された。

表３　対面レッスン（双方マスク着用）のメリット・デメリット

定義		内容と具体例
メリット	伴奏との合わせやすさ	タイムラグがないことで、伴奏に合わせて歌うことが可能となる。 （具体例） ・伴奏と合わせられること ・ピアノ伴奏に合わせて（ズレなく）歌うことができる
	教員の声の響きの確認	教員の声の響きを同じ空間で感じ取ることができる。 （具体例） ・響きを直接肌で感じられること ・先生の響きを真似する事ができる
	全身（筋肉）のバランスの確認	直接、全身を見ることができるため、双方、筋肉のバランスを確認することができる。 （具体例） ・全身のバランスを見てもらえる ・オンラインでは見えにくい体の使い方や動きを直接指導していただけることです
デメリット	マスクで口元が確認できない	双方の口元が確認できないため、マスク内の筋肉の使い方が分かりにくい。 （具体例） ・先生の表情筋を確認できない ・口元が見えないため、口の形など視覚による確認ができない
	マスクによる疲労感	マスクをすることで、歌うための呼吸法ができず疲労感がある。 （具体例） ・マスクで呼吸が苦しくなる点 ・酸欠になりやすくなる ・喉に余分な力が入っていつもより負担や疲労が大きかったように思う

(2) ライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリット

ライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリットについて、表４にまとめた。

メリットとして第一に「表情」が挙げられた。具体的な例としては、「先生の口の形が見える点」、「先生の表情と自分の表情を確認する事」であった。学生も教員もマスク外した状態でレッスンをしたため、口元を確認しながらレッスンをする事ができた。また、既述したように、パソコンやタブレットに内蔵されているカメラを双方の顔や口元が確認できるような位置に設置することで、表情や口元の動きを確認することが可能となった。COVID-19 流行前の対面レッスンの際にも口元の動かし方の指導は行っていたが、相手の顔に自分の顔を近づけて見ることを躊躇する学生の姿が見られた。ライブ型オンラインレッスンでは、画面越しに教員と学生双方の表情を確認するため、躊躇せず実施することが可能となった。また、画面を拡大して確認することも可能となったことから、対面レッスンの時より理解度が高まったことがうかがえる。第二に「場所」である。具体的な例として「自宅から受けることができる」、「（大学にはない）バランスボールが使用可能」が挙げられた。ライブ型オンラインレッスンでは、歌える環境を整えることで、自宅や好きな場所でレッスンを受けることが可能となる。また、大学にはないバランスボールなどの道具を用いて、指導することが可能となったため、学生のみならず教員のメリットにもつながった。第三に「録画」である。具体的な例として「録画をできること」、「ビデオに残す事ができる」が挙げられた。COVID-19 流行前までは、レッスン時の音声を録音している学生が多かった。ライブ型オンラインレッスン時に用いた Google Meet の録画機能は双方の録画が可能なため、表情や口元の指導について映像を通して確認することが可能となり、学生の学びを深めることにつ

ながることが示唆された。また、レッスン後の事後学習や次回レッスンの事前学習においても役立てられたため、表情や口元の技術向上に寄与したことが考えられる。

ライブ型オンラインレッスンのデメリットとしては、第一に「通信状況を整えることの難しさ」が挙げられた。具体的な例としては、「電波が悪いと内容が分かりにくくなること」、「電波状況に左右される点」であった。通信環境（Wi-Fi 環境）によって、画面が止まったり、タイムラグが生じたりすることでレッスンが中断されたこともあった。第二に「ピアノ伴奏との合わせにくさ」である。具体的な例として「時差がある」、「伴奏と合わせられないこと」が挙げられた。これは、第一に挙げた「通信状況を整えることの難しさ」とも大きく関連している。そのため、今後はこの点を考慮した指導の在り方について検討していく必要があるだろう。第三に「声の響きを確認することの困難さ」である。具体的な例として「先生の響きを体感できず真似する事が難しい」が挙げられた。学生も教員も異なる環境で、さらには画面を通してレッスンを実施していた。そのため、声の響きを的確に確認することは、非常に困難であったことがうかがえる。

これら課題を補うためには、学生の歌を動画提出または動画を YouTube にアップロードをしてもらい、教員がコメントをするなどオンデマンド型オンラインレッスンを併用する必要があるだろう。

表 4　ライブ型オンラインレッスンのメリット・デメリット

	定義	内容と具体例
メリット	表情	マスクをしていないため、表情筋や口の開閉等の指導ができる。 （具体例） ・先生の口の形が見える点 ・先生の表情と自分の表情を確認する事
	場所	自宅など、好きな場所で受講でき、大学のレッスン室にない道具を使用することができる。 （具体例） ・自宅から受けることができる ・（大学にはない）バランスボールが使用可能
	録画	レッスンを録画ができる。 （具体例） ・録画をできること ・ビデオに残す事ができる
デメリット	通信状況を整えることの難しさ	双方の電波状態により、通信状況に影響がある。 （具体例） ・電波が悪いと内容が分かりにくくなること ・電波状況に左右される点
	ピアノ伴奏との合わせにくさ	ピアノに合わせて歌うことが難しい。 （具体例） ・時差がある ・伴奏と合わせられないこと
	声の響きを確認することの困難さ	双方の部屋の環境が異なるため、声の響きが分かりにくい。 （具体例） ・先生の響きを体感できず真似する事が難しい

5　おわりに

本論では、COVID-19が蔓延する中、対面レッスンとライブ型オンラインレッスンを組み合わせたハイブリット型レッスンの実践内容とそのレッスンに関するアンケート調査について報告した。アンケート調査から、対面レッスンのデメリットをライブ型オンラインレッスンのメリットで補い、ライブ型オンラインレッスンのデメリットを対面レッスンで補えることが確認された。具体的には、双方にマスクを着用するレッスンでは口元がマスクで覆われているため、歌うために必要な表情筋および口元の開閉が（軟口蓋の開け方など）確認できなかった。この問題は、COVID-19が蔓延する以前においても、表情や口元の動きを近くで確認することに対して躊躇する学生もいたため、確認を求めることが難しく、指導が困難な点であった。その点について、ライブ型オンラインレッスンを実施することで表情や口元にスポットを当てたレッスンをすることが可能となり、表情筋や口の開閉について詳細に指導することができた。

一方で、ライブ型オンラインレッスンでは、先行研究でも指摘されていたようにタイムラグが生じることによる音ズレの問題が挙げられた。教員の伴奏で指導をすることが困難となったため、アカペラでレッスンを実施せざるを得なかった。さらに、学生と教員の環境が異なるため、声の響きを共有することができなかった。このライブ型オンラインレッスンのデメリットについては、対面レッスンでは補うことができた。よって、ハイブリッド型レッスンを実施することで、COVID-19が蔓延する前の対面レッスンと同等の学びを確保することにつながることが明らかとなった。

このように対面レッスンとライブ型オンラインレッスンにおいて生じるメリット・デメリットを把握し、各々のメリットを最大限発揮できるレッスン内容でハイブリッド型レッスンを実施することは、学生に多くの学びを提供することにつながることが示唆された。

ハイブリット型レッスンを充実するための課題として、対面レッスンとオンラインレッスンのレッスン内容にメリハリをつける授業計画を立てるとともに、それぞれの授業内容において修得すべき事項と各々のレッスン形態のメリット・デメリットを学生とともに確認する必要がある。また、表情や口元に特化したレッスン内容だけでなく、オンラインレッスンだからこそ実施可能な技術習得の在り方について模索する必要があるだろう。さらに、学生が録画した動画をYouTube等にアップロードしてもらった演奏を確認したうえでの指導の必要性も指摘できる。COVID-19が蔓延してから、動画審査を用いるコンクールが増えてきているため、録画された際の歌を確認した上で指導をする必要があるだろう。以上より、ウィズコロナ・ポストコロナ社会を見据えたハイブリッド型レッスンをより充実させて実施するため、今後は既述した課題について実証的に検討し、学生の学びを充実させる手がかりを探る必要があるだろう。

6　引用・参考文献一覧表

朝日新聞・河合塾共同調査2020「特集「ひらく 日本の大学」2020年度　調査結果報告」（2022年8月13日アクセス）https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/20/0203/tokushu.pdf

一般社団法人全日本合唱連盟第（3.1 版 2022 年 1 月 24 日更新）合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン 1-18 ページ

川上 健太郎 根津 知佳子 2021「音楽実技」における非対面型授業の課題と可能性～プレ導入に関する調査から～」『日本女子大学紀要』(68) 37-49

洗足学園音楽大学・大学院 2020「新型コロナウィルス感染予防のための ～行動様式のガイドライン～（2020 年 11 月 26 日）」（2022 年 8 月 13 日アクセス）https://www.senzoku.ac.jp/music/admis sion/pdf/crossarts_guideline2020.pdf

洗足学園音楽大学 SENZOKU ポータル シラバス照会　声楽研究Ⅰ～Ⅳ（2022 年 8 月 13 日アクセス）

全日本合唱連盟・東京都合唱連盟 2020「合唱活動における飛沫実証実験報告書（2020 年 12 月 8 日）」（2022 年 8 月 13 日アクセス）https://jcanet.or.jp/news/himatsu-JCAhoukoku1208s.pdf

総務省 2020「令和 2 年度 情報通信白書」（2022 年 8 月 13 日アクセス）https://www.soumu. go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/pdf/02honpen.pdf

館岡 真澄 2020「オンラインによる音楽演習の学習効果」『埼玉学園大学紀要』20 141-153

長澤 順・井上 修 2020「オンライン授業におけるピアノレッスンの特徴と可能性」『作新学院大学女子短期大学研究紀要』(4) 35-41

フレデリック・フースラー、イヴォンヌ・ロッド＝マーリング（著）須永義男、大熊文子（訳）1987『うたうこと　発声器官の肉体的特質―歌声のひみつを解くかぎ―』音楽之友社

文部科学省 2021「萩生田光一文部科学大臣記者会見録（令和 2 年 8 月 4 日）」https://www.mext. go.jp/b_menu/daijin/detail/mext_00082.html

文部科学省 2021「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の学生生活に関する調査等の結果について（令和 3 年 5 月 25 日）」（2022 年 8 月 13 日アクセス）https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf

文部科学省「令和 2 年度における大学等の授業開始等について（通知）」（2022 年 8 月 13 日アクセス）https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf

執筆担当

1　馬場由香・今岡多恵、2　馬場由香、3　馬場由香、4　馬場由香・今岡多恵、5　馬場由香・今岡多恵